名古屋大学留学生センター地域貢献特別支援事業

日本語ボランティアセミナー
「私が日本語ボランティアをするわけ」

浮　葉　正　親

はじめに

愛知県をはじめとする東海地域は，日本語を第二言語として学ぶ，いわゆる「日本語指導を必要とする外国籍児童生徒」が全国でもっとも多い地域である。小中学校教員だけでなく，地域のボランティアも日本語教育に積極的に関与している。ただし，ボランティア団体の多くは高齢者や主婦が中心となっており，メンバーの高齢化が大きな課題となっている。

そこで，このセミナーでは，貴重な戦力として活躍している若者たちをパネリストに迎え，若者の視点でボランティア活動への関わり方やその魅力を語ってもらった。参加者には，発表やディスカッションを通して，日本語ボランティア活動の魅力を知ってもらい，新たな担い手として参加を考えるきっかけにしてもらいたいというねらいであった。

【参加者】

平成21年２月14日，愛知県三の丸庁舎8F 大会議室で，日本語ボランティアセミナー「私が日本語ボランティアをするわけ」を開催した。参加者は83名，これに主催者側のスタッフ７名を加えて，計90名である。４人のパネリスト，小川裕美氏(公務員)，橋村青樹氏(大学生)，鈴木智恵氏（会社員），伊木・デ・フレイタス・ロドリゴ氏（大学生）の発表に続き，休憩を挟んで土井佳彦氏（とよた日本語学習支援システム）のコメントがあり，参加者との質疑応答が行われた。(案内チラシ参照)

【パネル発表（要旨)】

⑴　小川裕美さん（公務員）

大学で日本語教育を専攻し，早く日本語を教えたくて，留学生のチューターや親子の日本語教室，地域のボランティア教室でも教えていた。また，本屋でアルバイトをしたり外国人の無料医療相談をしているNPO 法人でも働いたことがある。そのような経験から，「日本語を通して地域の外国の方と社会的に関わりたい」と考えていた。その希望がかない，現在，岐阜県可児市で外国籍の子どもたちに日本語を教えたり，公立学校入学のサポートをしている。

私が長く関わっている NIC 日本語教室について簡単に紹介する（中略)。日本語教室で得られるものは，日本語を教えるということに止まらず，その活動に参加しているさまざまな方からの情報，また学習者の方からはその国の情報であるとか日本での生活に関わることなどである。現在，この不況で失業している人が多いが，それと同時に，日本語を勉強したいという人が増えている。これはそれだけ日本社会に関わろうという人が増えていることでもあり，私たちが外国の方と交わるチャンスでもある。「私がボランティアをするわけ」というテーマに即していえば，まず楽しいから，次に自分がやりたいことだから，そして人と人，双方向のやりとりがあるからだと答えたい。

⑵　橋村青樹さん（大学生）

「ジョイア」という子どもたちの学習支援ボランティアをしている団体の活動について紹介させていただく。ジョイアは，三重大生と教員，社会人有志により，日本語を母語としない外国籍児童生徒への教科学習支援活動を目的に，2005年９月に結成された。ジョイアの活動は，アスト津（駅ビル）３階の交流スペースで毎週土曜日，外国籍児童の多い亀山西小学校で月２回行われている。(中略)

昨年夏，ジョイアのスタッフにアンケート調査を実施した。それによれば，サポートをして良かったことは，子どもたちがここに来ることを楽しみにしている

こと，日本語の話せない子どもが話せるようになり，親にも喜んでもらえたことなどである。一方，サポートをして大変だったことは，集中が切れて遊び出してしまう子どもがいて，その子どもたちにどうやって対応したらいいか分からないという意見が多かった。課題としては他に，試験期間中にスタッフが不足すること，また日本語のできない子どもが来てもすぐに来なくなってしまうこと，つまり本当にサポートを必要としている子どもたちに支援の手が届かないことがあげられる。これらに対処するには，日本語教育の経験のある社会人の方のサポートがもっと必要になるだろう。

私が考える学習支援ボランティアの魅力は，まず何よりも大学生という立場を活かせるということにある。小学校から高校までの教科の知識がまだ頭に残っていて，それが子どもたちの学習に活かせるというのが自分たちの存在意義だと思う。また，ボランティアをすることで地域に暮らす外国人の子どもや家族のことを知り，将来に向けて自分の視野を広げることができたのも嬉しかった。スタッフや子どもたちとの出会いはとても貴重な経験であり，日本語教師に限らず国際的な仕事をしたい人には有意義だと思う。

⑶ 鈴木智恵さん（会社員）

海外に興味を持つようになったのは，小学校５年生のとき，担任の先生の提案でカンボジアに文房具を送ったことである。その先生の話から，小学生の自分にできることは鉛筆を送ることだけ，今はしっかり勉強をすること，そして将来自分が勉強したことを世界の人たちに役立てたいと考えた。実は，そのころからすでに海外で日本語を教えたいと考えていた。（中略）

大学３年生のとき，今日と同じような研修会があり，講師をしていた「ことばの会」のメンバーに出会った。その人たちがとても輝いて見え，その会の活動に参加した。４年生のとき，言葉の会の先輩にアルバイトを紹介された。これから日本で働くベトナムから来た研修生に日本語を教える仕事だった。彼らとは年も近く教えることは楽しかったが，彼らが言うには，現場では日本語を話す機会がほとんどない，研修を受けていたころは楽しかったが，今は何で日本に来たんだろうと後悔している，という。彼らの話を聞いて，やはり現場で，彼らが働いている場所で日本語を教えたいと考えた。そこで，海外で日本語を教えるのではなく，企業に就職し，そこで日本語の支援をしながら，働く現場の環境を変えていきたいと考えた。そして，製造業を営む中小企業に就職した。

現在，甚目寺町の「JJ にほんごくらぶ」でボランティアをしている。（中略）職場では，ベトナム人６人を対象に日本語クラスを作ってもらった。当初は通訳を入れて指示を伝え，日本語はまったく習わせない方針だった。会社からは，それならあと２か月で日本語の指示が分かるようにしてほしいといわれたが，到底不可能なので，現場で助けてくれる人を作り，現場を変えていくことにした。現場の人たちと研修生がお互いに学び合うという姿勢で，現場の人たちに教室に入ってもらう。現在，不況で日本語クラスは運営できなくなってしまったが，当面通訳に日本語を教えている。将来的には研修生が研修生を教えるかたちが取れればいいと考えている。

ボランティア活動の魅力まとめると，次の３点である。学校や社会で学んだことを必要としている人と共有できること，無理をしなくてもできることこと，そして新たな発見や出会いがあることである。

⑷　**伊木・デ・フレイタス・ロドリゴさん（大学生）**

13年前来日し，はじめは日本語が分からず苦労した。大学１年生のとき，オーストラリアに滞在する機会を得た。そこで見た外国人に対するボランティア活動に刺激を受けた。帰国後，父を手始めに家で日本語を教え始め，それが両親の仲間に広まりどんどん学習者が増えてきたので，教室を借りることにした。最初は13人，一か月後に25人，半年後には35人を超え，友人の家の倉庫を改造して教室にしている。

この教室に来た人にはニーズを確認し，３つのレベルからクラスを選んでもらう。教室では，「ます形」ではなく，「普通形」を中心に教えている。なぜなら，教科書で学んだ日本語が通じないからであり，「友達を作りたい」「近所の人と仲良くしたい」というニーズに対応するには「一緒に遊びにいかん？」というような普通形の方がいい。また，日本語を教えるだけでなく，学習者の話を聞くことで信頼感が育ち，彼らのストレスを解消する場にもなっている。短期滞在者のためにポルトガル語の新聞や雑誌を読む時間ももうけている。

しかし，最近の不況で教室の方向転換を迫られた。職を得るために面接に受かることが優先されるので，「ます形」（丁寧語）を中心にせざる得なくなった。面接では試験官を「だませたら勝ち」なので，発音についても厳しく教えるようにしている。また，履歴書の記入の仕方を教え，面接の練習も実際の場面を想定して徹底的にやっている。さらに，新しい展開としては，英語で教室を開き，ブラジル人と日本人が一緒に学べるようにしたいと考えている。

私がボランティアを続けるのは，私自身が苦労したこともあり彼らのためにできることをしてあげたいからであり，また本気で教えればそれが相手に伝わること，そしていつもいわれるわけではないが「ありがとう」と言われること，誰かのためにというよりも自分のためにやっているような気がする。

【コメント】

土井佳彦氏（とよた日本語学習支援システム）

（発表者との質疑応答）

Q（小川さんに）日本語教育について大学で学んだこととボランティア教室で必要とされることは違うと思うが，その点についてどう考えるのか。また，アルバイトの経験はボランティア活動に役に立っているか。

A（小川）ボランティア教室で子どもたちに教えていると，言葉を教えているというよりもその子どもの人間成長に役立つことを教えていることが多い。その点がもっとも違うと思う。また，アルバイトの経験は大いに役に立っている。より多くの経験をすれば伝えることも増えていくのではないかと思う。

Q（橋村さんに）大学生の皆さんと子どもたちとの関係についてはよく分かったが，まわりの大人たち，保護者や学校の先生たちとの関係性をどのように考えているのか。

A（橋村）子どもたちの家族と出会えるのは送り迎えのときだけだが，学校であったことを伝えることもできるので，大切にしていきたい。先生たちとの関係も限られているが，ジョイアの活動を知ったある学校から支援を要請され，教育委員会の担当者と話し合いをしたことがある。

（土井）子どもたちの日本語教育では，保護者や学校現場の担当者との関係が重要である。大学生のボランティアが活躍すると，「丸投げ」されることもあるから，両者との関係を築いてほしい。

Q（鈴木さんに）発表資料の中に「できることを，できる人が，できる限り」とあるが，あえてそれをひっくり返し，「できないこと，できるけどしないこと」があるか。

A（鈴木）私は直接現場に入ることはない。そこで日本語を教えることもできるが，しない。もしすれば，私に「丸投げ」されるからである。現場のスタッフが助け合ってやれる環境を作るのが私の役割だと考える。

（土井）それを聞いて安心した。最初は善意で始めたことがついつい負担になり，結局やめてしまうというこ

とがよくある。自分もボランティアを始めたころ，身体障害者の支援をしている方から，「何かをしてあげるのではなく，何をしないで挙げられるかをいつも考えている」と聞かされ，目から鱗が落ちたことがある。そのような「引き算」の発想がボランティアを長く続けていく上で必要だと思われる。

Q（ロドリゴさんに）不況に合わせて活動内容を変えるなど，ロドリゴさんの工夫や熱心さはわかるが，教室の運営は一人でできることではない。ロドリゴさんが４年生になり就職活動などで忙しくなってこの教室に関わることが出来なくなったとき，代わりにやってくれる人はいるのか。
A（ロドリゴ）以前忙しくて弟に任せたこともある。思ったよりも上手にやっていたようだ。もっと教室の運営をシステム化していきたい。
(土井)ボランティア教室の中には，代表がやめたら活動が成り立たない団体も少なくない。システム化するかどうかはともかく，できるだけ長く続けてほしい。

（全体コメント）
４人の発表者にはいろいろなスタイル教室を見てほしい。そこでいろいろな人と会って，自分の教室のあり方を見つめ直してほしい。一方，会場にいらっしゃっているボランティア教室の方には，見学の機会を与えてほしい。見学をお願いし，約三分の一の教室から断られた経験がある。一度限りの見学者を受け入れる余裕がないのも理解できるが，これからボランティアを始めようと考えている人に参加のチャンスを与えてほしい。

【質疑応答】
Q　自分たちの教室には若い人が少ない。どうしても年配者が中心になってしまうのだが，若い方たちから見て，年配の方の教え方にどんな問題があると思うか。
A（小川）ボランティアって言葉の意味の大きさは人それぞれだと思うが，若い人にとってはとても重い。若い人の参加を増やすには，「外国人の友だち作らない？」とか「おいしいもの食べに来ない？」と誘ってくれた方が入りやすい。
A（土井）多くのボランティア教室は年配の方が中心になっているが，年配の人の経験が教室の中で活かされていないような気がする。教科書中心なら，その人である必要はなく，誰でもよいのではないか。年配の方の経験は若い人たちにも勉強になると思う。

Q 「ボランティア」という言葉を日本語に訳すとどうなるか。
A（土井）ボランティアの語源となったボランタスというラテン語には西欧の宗教的な背景があるらしく，日本語に訳しにくい。ボランティアという何か概念があってそれに自分たちの活動を合わせるのではなく，自分たちの活動を何と呼ばせるかが重要ではないかと思う。私が関わっている「とよた日本語学習支援システム」では，ボランティアのことを「日本語パートナー」と呼んでいる。外国人が日本語を学ぶだけではなく，日本人も外国人に伝わりやすい日本語を学んでいる。お互い交流しながら助け合いながら学んでいる。

Q　学習者のニーズをとらえることが重要だと思うが，学習者が何をしたいのかを捉えるコツや心がけていることがあれば教えてほしい。
A（橋村）ジョイアでは，教室に初めて来た子どもに，教科では何を勉強したいか，日本語がどれくらい話せるかなどを尋ねているが，実際には子どもたちに接しながらそれを私たちが知っていく部分が大きいと思う。
A(鈴木)社内のことをいえば，研修生たちはとくに日本語を学びたいと思ってはいない。働いてお金をもらえて家族に送れればよいと考えているかもしれない。ニーズをとらえるというよりも，いかにニーズを引き出すかが重要だと考える。学習者が何に興味があって何を避けているのか，こちらから話しかけて引き出している。学習がこれを学びたいと言って来るニーズも実はかなり揺れている。本当にそれを学びたいのか，活動の中で引き出してほしい。

【アンケートの結果】
参加者：83名（主催者側８名を除く）
アンケート回答者：48人（回収率58％）

⑴研修会の内容は期待に沿うものでしたか。
・期待以上で，とても満足した。　：17名（35％）
・期待通りで，とても満足した。　：15名（31％）

・期待通りで，まあまあ満足した。：13名（27％）
・やや期待はずれだった。　　：３名（６％）
・まったく期待はずれだった。　：０名
（無回答：１名）

⑵今後，どのようなテーマの研修会をご希望ですか。

○ボランティアに聞く，こういう研修会をもっと多く開いてください。研修会というと，日本語の教え方ばかりで，実際にボランティアをやっている人の生の声を聞くことができる企画を望みます。

○外国人を受け入れている企業の採用担当者の話を聞きたいです。国際競争力をつけると息巻く企業と生活者の幸せとはどこで折り合いをつけられるのか。外国人の日本語教育に企業や行政はどこまで責任を持てるのでしょう。

○外国人が日本語教室で学習した経験を語ってもらいたい。

○同じパネリストにさらに踏み込んだお話をうかがいたいです。内容は何でも構いませんが，具体的なエピソードやきれい事だけでは語られない部分を聞いてみたいです。

○保護者の人々の支援の方法を学校や地域はどのように関わればいいのか。子どもだけでは解決できない問題がたくさんある。そのようなテーマをぜひお願いしたい。

○学校現場へのボランティアの入り方，支援について。

○小学校高学年や中学生指導のためのリライト教材の作成，活用と，カリキュラム作成と進学・進路指導の実際に関するワークショップ式の講座。

○就職支援のための具体的な指導カリキュラムなど。

○講師を中心とした研修会を望みます。

○日本語教室の様子をビデオ，写真などで説明していただくのが分かりやすく，ためになると思う。

⑶この研修会に関するご意見，ご感想をご自由にお書き下さい。

○若い人たちの発表を聞いて，しっかりとした識見を持ってやっておられて感心した。現状の分析も客観的，科学的で，普遍的なものになっていると感じた。

○日本語ボランティアのことについてよく理解しました。自分自身もこれから日本語ボランティア活動をやってみたいと感じました。

○日本語教室のボランティアの高齢化が進む中で，若い世代のボランティアへの関わりの声を聞いて安心した。日本語ボランティアステップアップ講座で「ちゃんと教える」から「ちゃんと伝える」に変わっているということを教えてもらっているが，講習会では教授法（日本語教育）ばかり取り上げられて，その矛盾に苦しんでいた。今日のロドリゴ君，鈴木さんの地域やニーズを考える姿勢に感心するとともに，私たちの教室にもそういう若い世代を育てていかねばと思った。

○４人のお話がとてもためになりました。それぞれの経験を聞くことができ，自分も何かに挑戦してみようという気持ちになりました。特にロドリゴさんのお話が熱意が伝わり，すばらしかったです。土井さんのコメントで，やれることを考えるだけではなく，やらないことも考えるのが大事と聞いて，なるほどと思いました。

○若者の参加が年配者に比べ少ないように感じました。日本語教育全般の関心はどうなんでしょうか。現役学生の参加が少ないのがちょっと残念に思いました。

○様々な人が様々な形で日本語ボランティアに関わっていることを知ることができ，とても有意義でした。欲張らず，自分のできることを丁寧にやっていこうと心に芽生えた研修会でした。

○とてもいい刺激になりました。ボランティアセミナーというと，献身の喜びなど，大事ではありますが，決まり切った話を予想していました。しかし，周りを巻き込んで活動されるくらい力強い方のお話が聞けてよかったです。

○ボランティアという定義も難しいと思いますが，まずは自分が楽しみながら少しずつ始めていきたいなと思いました。今日お話しを聞いただけでもすごい発見がありました。

○年齢が同じ，もしくは近い方たちのお話をお聞きすることで，来る前よりも，ボランティアをする機会に加わりたいと思えるようになりました。日本語を教えることを職業にできたらすばらしいですが，そうでなくても休日に，もしくは仕事の傍らで教えることもとても意義のあることだと実感しました。

○同年代の方の活躍を聞くことができて，とてもよかったです。私も学生で鈴木さんの仕事場での活動が新鮮に感じました。またこういう機会があれば参

加したいと思います。自分の今後のボランティア活動に活かしていきたいです。

【今後の課題】

留学生センター，㈶愛知県国際交流協会，㈶名古屋国際センター，東海日本語ネットワーク，四者の連携事業は今年度が７回目となる。過去４回は，東京や大阪から講師を迎え，年少者の日本語教育をめぐる研修会を開催し，学校関係者と地域のボランティアが一堂に会する貴重な機会を提供してきており，一定の成果を上げてきたと自負している。今年度は，地域の日本語ボランティア教室の高齢化を背景にして若い担い手を増やしたいという要請を受け，若者を対象とした研修会を企画したのである。

しかし，実際には参加者83名のうち，30歳以下は21名にとどまった。若者を対象にするという点で例のない取り組みであったため，広報のし方に問題があったようである。もし，この事業を継続するなら，日本語教師養成課程のある大学だけでなく，専門学校を含めてもっと広く情報を流し，新聞などの媒体を利用するなど，何らかの対策を講じていかねばならない。

また，質疑応答の時間で印象に残ったのは，「日本語ボランティア」という言葉のイメージである。若い世代にとって，「ボランティア」という言葉は非常に重く受け止められるようである。外国人と接する楽しさというよりも，何かをしてあげなくてはならないという負担感につながるようなのである。土井佳彦氏によれば，とよた日本語学習支援システムでは，その点を考慮して「日本語パートナー」という言葉を用いているそうである。若い世代に日本語ボランティアの活動を広めていくには，ボランティアのイメージをもっと軽く，身近なものに変えていく努力も必要ではないかと考える。

平成20年度

名古屋大学留学生センター地域貢献事業

日本語ボランティアセミナー

「私が日本語ボランティアをするわけ」

東海地方は定住外国人も多く、日本語ボランティアの活動が盛んな地域です。ボランティア団体の多くは高齢者や主婦が中心となっていますが、若い方たちも貴重な戦力として活躍しています。この催しでは、パネラーに若者の視点でボランティア活動への関わり方やその魅力を語ってもらい、ディスカッションを通して新たな担い手として参加を考えるきっかけにしてもらいたいと思います。異文化との出会いや外国人との交流に興味のある若い方の参加をお待ちしています。

主　催　名古屋大学留学生センター、㈶愛知県国際交流協会、㈶名古屋国際センター、東海日本語ネットワーク

後　援　愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会

日　時　**平成21年2月14日（土）**
13：20～16：30（開場12：45）

場　所　**愛知県三の丸庁舎8F　大会議室**
TEL　052－961－7904　㈶愛知県国際交流協会交流共生課育成担当
名古屋市中区三の丸2丁目6番1号
地下鉄名城線「市役所」駅　5番出口から西へ徒歩5分

日　程
12：45　受付開始
13：20　開会挨拶
13：30　パネル発表「私が日本語ボランティアをするわけ」
　　鈴木智恵氏（会社員）
　　伊木・デ・フレイタス・ロドリゴ氏（大学生）
　　小川裕美氏（公務員）
　　橋村青樹氏（大学生）　ほか
15：00　休憩
15：20　コメント、質疑応答
　　土井佳彦氏（とよた日本語学習支援システム）
15：50　日本語ボランティア団体の紹介
16：30　閉会

参加資格　日本語ボランティア活動に関心のある若者

定　員　100名

参加費　無料

申込み　事前申し込みの必要なし。

【問合せ先】名古屋大学留学生センター　浮葉正親　〒464－8601　名古屋市千種区不老町
Tel：052-789-5771　Fax：052-789-5100　E-mail：j46084a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp